

Is it beauty for such a time as this

この時のための美しさ

御言葉：エステル記1 - 4章

要 節：エステル記4：14

4：14 私もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」"For if you remain silent at this time, relief and deliverance will arise for the Jews from another place and you and your father's house will perish. And who knows whether you have not attained royalty for such a time as this?"

神様がエステル記の御言葉を私たちに与えてくださったことを感謝致します。エステル記を通して私たちに与えて下さる神様の御心を悟り、受け入れ、今週も、今年も力強く生きることができるよう祈ります。

人はこの世に生まれてきて、大人になり、やがて死んでいきます。これは変わらない不変の真理とも言われています。国民的歌手みそらひばるの有名な歌に、人生って、不思議なものです。という歌詞がありますが、本当に人の人生はいつ、何が起きるのかわからないものです。その中で、私たちは何を、どのように備え、どんな人生を送るべきかについて常に迷い、いつも戸惑い、悩みながら生きています。

そんな私たちに道しるべとなる聖書の御言葉の一つが、今日のエステル記の御言葉です。エステルという名前の意味は星だそうです。夜空に輝くきれいな星、夜道にさまよう旅人の道しるべとなる星のような人生を生きたエステル記を通して、そのエステルの人生を導かれた主の摂理の偉大さを学び、主の摂理のときのために準備されたエステルとモルデカイの信仰を学ぶことができますように祈ります。

今日のエステル記は1章から4章の御言葉です。その御言葉で、正当な理由のない二つの怒りが書かれています。そして、正当な理由のない二つの怒りの裏には神様の摂理が働いており、その主人公がエステルとモルデカイです。まず、一つ目の正当な理由のない怒りからエステル記は始まります。1章から2章の内容です。イエス様がこの世に来られる前、すなわちBCの485年ぐらい前に、ペルシアという帝国があります。その国は周辺の127の国や町をまとめている巨大帝国でした。その国王の名はアハシュエロス王で、就任後3年ほど立って、すべての首長と家臣たちのために宴会を催しました。彼の父が強力な武力をもって周辺の国や村落をペルシアの支配下にして、その国王の席を譲り受けたアハシュエロス王が催す宴会は盛大そのものでした。輝かしい富と栄誉を誇らしげに表し、あらゆる宝石で飾られた食卓に、全国から集められた珍味の食材と最高級のお酒が7日間、食べ放題、飲み放題でした。王は7日目に心が陽気となり、自分のとっておきの最高のものを民と首長たちに見せようと思いました。それが王妃ワシュティでした。ワシュティという名前のように蜂蜜のように甘いほど美しい容姿に、王冠をかぶらせ、見せようと思いました。しかし、王妃ワシュティが宦官から伝えられた王の命令を拒んで来ようとしなかったため、王は非常に怒り、その憤りが彼のうちに燃え立ちました。王の怒りとは、自分のうちに燃え立ち、自分自身を燃やしてしまうほどの激しい怒りでした。王妃が王の命令に断った理由は確かではないですが、ペルシアの習慣として、見知らぬ人には自分の妻の顔を見せないというものがありましたし、宴会の場で威厳を保つべき王妃様がみんなの前でさらしものになることは王様の威厳のためにも良くないことです。しかし、この王は非常に怒りました。自分

の顔に泥が塗られ、王の威厳が損なわれたと思ったからです。そして、ワシュティ王妃を廃止することで、女たちは、みな、自分の夫を尊敬するようにさせるべきであるという側近の人の進言を聞き入れました。アハシュエロス王の憤りがおさまると、若い側近が全国の容姿の美しい未婚の娘たちを集め、その中から、王妃を一人決めましようと言いました。王はそのとおりに命じました。

この正当な理由のない怒りから、エステルが王妃になるきっかけになります。王の命令が全国の、それぞれの言葉に訳され、伝えられたとき、王の宮の政府の管理職についていたモルデカイという人がいました。彼は囚われ身となりエルサレムからバビロンに移り住まわせられたユダヤ人でした。モルデカイにはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していました。エステルは、姿も顔だちも美しかったおとめでした。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としました。そして、王のその法令が伝えられて、多くのおとめたちが王の城に集められたとき、エステルも集められ、城に入りました。エステルは王の法令を実行する管理者の好意を得て、特別に王宮から選ばれた七人の侍女があてがって、もっとも良い部屋が与えられるほど特別扱いを受けました。

そして、王のところに行く時となり、王はほかのどの女たちよりも愛しました。やがて、エステルは王妃となりました。しかし、エステルはモルデカイが彼女に命じていたことすなわち、自分の生まれをも、自分の民族をも明かしてはならないということを、モルデカイに養育されていた時と同じように、彼の言いつけに従っていました。王の正当な理由のない怒りがエステルを王妃にしたのです。人間の頭では想像もつかない一方的な神様の摂理だとしか言うような出来事でした。

すべてが順調のように思われたとき、もう一つの正当な理由のない二つ目の怒りが出てきて、モルデカイとユダヤ人とエステルを危機にさらします。エステルが王妃となったとき、王はアガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、彼とともにいるすべての首長たちの上に彼の席を置きました。それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからです。

しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうともしませんでした。王の命を狙うものをエステルに知らせ、王の命を助けるほど、忠誠心の強かったモルデカイでしたが、この命令は受け入れることはできませんでした。なぜなら、モルデカイはこの世を創造された主である神様だけを礼拝するユダヤ人だったからです。この話がハマンの耳に入りました。ハマンはモルデカイが自分に対してひざもかがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされました。ハマンはモルデカイだけではなく、すべてのユダヤ人を滅ぼし、根絶やしにしようと思いました。

おそらく、ハマンがアガグ人だからでしょう。アガグとはイスラエルの霊的指導者サムエルに体がずたずたになって死んだアマレック人の王だったからです。アマレック人は昔から主である神様の民イスラエルの敵の中でも敵でした。神様に敵対し、イスラエルを常に滅ぼそうとしたものたちでした。サムエルはそのアマレックの王であるアガグを殺し、アマレック人を滅ぼそうとしました。その生き残りの子孫がハマンだったのです。ハマンはモルデカイ一人が自分にひざもかがめず、ひれ伏そうともしないことを理由に、ユダヤ人全部を滅ぼそうとし、王と同じように自分のうちに燃え立ち、自分自身を燃やしてしまうほどの同じ激しい怒りを燃やしました。彼は王をそそのかして、ユダヤ人を滅ぼそうと仕向けました。「もしも王さま、よろしければ、彼らを滅ぼすようにと書いてください。私はその仕事をする者たちに銀一万タラントを量って渡します。そうして、それを王の金庫に納めさせましょう。」そこで、王は自分の手から指輪をはずして、アガグ人ハメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンに、それを渡しました。そして、王の法令は王のすべての州へ送られ、それには、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えと書いてありました。

一つ目の正当な理由のない怒りがエステルを王妃にした神様の摂理があるなら、このユダヤ人の絶対絶命の危機

を招いた二つ目の正当な理由のないハマンの怒りの裏にも必ず神様の摂理があるのです。その神様の摂理を信じたのがモルデカイでした。今日の御言葉のハイライトである4章の御言葉です。王の命令が届いたすべての州においても、ユダヤ人のうちに大きな悲しみと、断食と、泣き声と、嘆きとが起こり、多くの者は荒布を着て灰の上ですわりました。モルデカイも着物を引き裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、大声でひどくわめき叫びながら町の真中に出て行きました。これがエステルに知らせられました。

モルデカイはエステルハマンの悪行の一部始終を知らせ、彼女が王のところに行って、自分の民族のために王にあわれみを求めるように彼女に言いつけてくれと頼みました。しかし、エステルはこう答えました。「王の家臣も、王の諸州の民族もみな、男でも女でも、だれでも、召されないで内庭にはいり、王のところに行く者は死刑に処せられるという一つの法令があることを知っております。しかし、王がその者に金の笏を差し伸ばせば、その者は生きます。でも、私はこの三十日間、まだ、王のところへ行くようにと召されていません。」もっともな理由です。彼女がモルデカイの頼みを実行できない妥当な理由でした。そこで、モルデカイはエステルに返事を送って言った。14節をご覧ください。一緒に読んでみましょう。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

「もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

神様の摂理に対する、神様の民への神様の救いに対するモルデカイの信仰を学ぶことができます。すべてが主の摂理である！！。このモルデカイの信仰を私たちが学ぶべきです。私たちの人生の中で、どんな場合でも、どんな状況の中でも、どんなことが起きても私たちが主の摂理を受け入れ、信じることは大切です。

今までの自分の人生のすべてが主の摂理であることを認め、主が主の時に使うために、私たち自身一人一人を導いてこられていることを信じなければなりません。主の時がいつなのかわかりません。今かもしれないし、年若い死ぬ直前かもしれないし、もしかして死んだあとにそのときがくるかもしれないし、私たちの人生に、主のときは必ず来ます。なぜなら、主に用いられるために私たちはこの世に創造され、生まれてきたからです。私たちの人生を主に委ね、主の摂理を認め、主の時に用いられることを信じて生きる信仰が大切です。

私もモルデカイの信仰を持つように祈ります。自分が今受けている試練を少しずつ理解し、認め、受け入れることができました。しかし、自分のことだけではなく、自分の周りの人々、同労者や苦しみを受けた人たちを考えると、あまりのつらさにときどき、気が狂いそうです。すべての自信がなくなり、主に頼るようになり、毎日のようにキャンパスで祈らなければ気が狂いそうな自分の姿を受け入れています。これもまた神様の摂理だと思ようになりました。今は本当に死にたいほどつらくて苦しむべきことですが、いつか主のときに、主のしもべとして用いられるための訓練として信じています。モルデカイのように、すべてが主の摂理である！！。信仰をもって、自分に与えられた不思議な人生を生きる勇気を与えてくださる主に感謝いたします。

モルデカイにすべてが主の摂理であり、このときのためにあなたに美しさを与えて王妃とさせた主の摂理を、信じなさいと言われたエステルはモルデカイに返事を送って言いました。4章16節をご覧ください。一緒に読んでみましょう。「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」

私たちが主の摂理を信じ、自分の人生を主に委ねるために必要なものがあります。それは信仰の決断です。口だけでは主の摂理の御わざに用いられません。主の摂理に、主のときに用いられるためには、エステルのような「たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」という信仰の決断が必要です。信仰の決断とはどのように持つことができますか。それは日々の生活の中で、神様の摂理に対して信仰の決断のモデルとなってくださったイエス様をもっと深く学び、従うことです。

イエス様は、ヨハネ 12:24 で、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」と信仰の決断について教えてくださいました。「たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」エステルの信仰の決断には、主イエスキリストの十字架の尊い信仰の決断の姿が隠されているのです。

使徒パウロは、ガラテヤ 2:20 で「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と告白しています。私たちの主である神様の御心に従い、罪人である私たちの救いのために、罪のまったくないイエス様をご自分のいのちを十字架でいけにえとしてささげました。

私たちの人生の中で一番必要なのは、エステルのような、イエスキリストの信仰の決断を学ぶことです。モルデカイに預けられてからモルデカイに従順の心でいたエステルの心は、神様の摂理の前でのイエス様と同じ心でした。神様の御心にしたがってご自身を捨ててこの世に来られ、創造主が被造物に仕えるしもべとなられ、神様の御心に従順して十字架につけられたイエスキリストこそ、私たちが学ぶべき信仰の決断の模範であり、私たちの人生の救い主です。

私たちが自分の人生の中で、日々の生活の中で、良い牧者であるイエス様を学び、イエス様の謙遜を学び、イエス様の犠牲を学び、イエス様の信仰を学び、イエス様のゲッセマネの祈りを学び、イエス様の十字架を学び、イエス様の死者の中からよみがえられた復活を学ぶ生活をするのが大切です。

私たちの人生の中で、神様の摂理の、そのときのために、イエスキリストの十字架とよみがえりを学ぶ生活を送り、従順による信仰の決断ができ、主のときに用いられる人生となりますように祈ります。

私たちの人生には自分が理解できないことや受け入れがたい現実が起こったりします。世の不義によってつぶされそうになり眠れぬ夜を過ごすときもあります。主を信じ、主に従おうとしているのに、むしろ目の前の状況は悪くなる一方のときもあります。そのとき、今日のモルデカイのような信仰を思い出しましょう。全てにおいて主の摂理があることを信じましょう。そして、そのとき、信仰の決断をしましょう。エステルのように、私たちの救い主であるイエスキリストに学び、したがって、信仰の決断をしましょう。すると、主は私たちを見守り、私たちの人生を祝福し、主にあって喜びと栄光の冠が与えられます。

私と皆さんが主の摂理を信じ、主の決断を学び行うすばらしい人生となりますように祈ります。

Is it beauty for what?

御言葉: エステル記1-4章

要 節: エステル記4:14

4:14私4:14 もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」”For if you remain silent at this time, relief and deliverance will arise for the Jews from another place and you and your father’s house will perish. And who knows whether you have not attained royalty **for such a time as this?**”

I. 王妃になったエステル (1、2章)

1. アハシュエロス王が催した宴会はどうでしたか。(1-8)王は王妃に何を言いましたか。(9-11)しかし、なぜ王の命令を拒んだでしょうか。(12a)王妃に対する王の心はどう変わったでしょうか。(12b)

1:1 アハシュエロスの時代のこと・・・このアハシュエロス王は、ホドからクシュまで百二十七州を治めていた。・・・1:2 アハシュエロス王がシュシヤンの城で、王座に着いていたころ、1:3 その治世の第三年に、彼はすべての首長と家臣たちのために宴会を催した。それにはペルシヤとメディアの有力者、貴族たちおよび諸州の首長たちが出席した。1:4 そのとき、王は輝かしい王国の富と、そのきらびやかな栄誉を幾日も示して、百八十日に及んだ。1:5 この期間が終わると、王は、シュシヤンの城にいた身分の高い者から低い者に至るまですべての民のために、七日間、王宮の園の庭で、宴会を催した。1:6 そこには白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結びつけられ、金と銀でできた長いすが、緑色石、白大理石、真珠貝や黒大理石のモザイクの床の上に置かれていた。1:7 彼は金の杯で酒をふるまったが、その杯は一つ一つ違っていた。そして王の勢力にふさわしく王室の酒がたくさんあった。1:8 それを飲むとき、法令によって、だれも強いられなかった。だれでもめいめい自分の好みのままにするようにと、王が宮殿のすべての役人に命じておいたからである。1:9 王妃ワシュティも、アハシュエロス王の王宮で婦人たちのために宴会を催した。1:10 七日目に、王は酒で心が陽気になり、アハシュエロス王に仕える七人の宦官メフマン、ビゼタ、ハルボナ、ビッグタ、アバグタ、ゼタル、カルカスに命じて、1:11 王妃ワシュティに王冠をかぶらせ、彼女を王の前に連れて来るようにと言った。それは、彼女の容姿が美しかったので、その美しさを民と首長たちに見せるためであった。1:12 しかし、王妃ワシュティが宦官から伝えられた王の命令を拒んで来ようとしなかったため、王は非常に怒り、その憤りが彼のうちで燃え立った。

2. 王の側近の者はなぜ王妃ワシュティを処分しようとしたのでしょうか。(13-22)このことをきっかけに、王のすべての州の一家(家庭)にどんな秩序を命じましたか。(22)

1:13 そこで王は法令に詳しい、知恵のある者たちに相談した。・このように、法令と裁判に詳しいすべての者に計るのが、王のならわしであった。1:14 王の側近の者はペルシヤとメディアの七人の首長たちカルシェナ、シェタル、アダマタ、タルシシュ、メレス、マルセナ、ムムカンで、彼らは王と面接ができ、王国の最高の地位についていた。・1:15 「王妃ワシュティは、宦官によって伝えられたアハシュエロス王の命令に従わなかったが、法令により、彼女をどう処分すべきだろうか。」1:16 ムムカンは王と首長たちの前で答えた。「王妃ワシュティは王ひとりではなく、すべての首長とアハシュエロス王のすべての州の全住民にも悪いことをしました。1:17 なぜなら、王妃の行ないが女たちみなに知れ渡り、『アハシュエロス王が王妃ワシュティに王の前に来るようにと命じたが、来なかった。』と言って、女たちは自分の夫を軽く見るようになるでしょう。1:18 きょうにでも、王妃のことを聞いたペルシヤとメディアの首長の夫人たちは、王のすべての首長たちに、このことを言って、ひどい軽蔑と怒りが起こることでしょう。1:19 もしも王によろしければ、ワシュティはアハシュエロス王の前に出てはならないという勅令をご自身で出し、ペルシヤとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないようにし、王は王妃の位を彼女よりもすぐれた婦人に授けてください。1:20 王が出される詔勅が、この大きな王国の隅々まで告げ知らされる、女たちは、身分の高い者から低い者に至るまでみな、自分の夫を尊敬するようになりましょう。」1:21 この進言は、王と首長たちの心になかったので、王はムムカンの言ったとおりにした。1:22 そこで王は、王のすべての州に書簡を送った。各州にはその文字で、各民族にはそのことばで書簡を送り、男子はみな、一家の主人となること、また、自分の民族のことばで話すことを命じた。

3. この出来事後、王国のすべての州にいる未婚の娘たちにどんなことが起きましたか。(2:1-4) エステルはどんな女性でしたか。(5-7) エステルはモルデカイにどれくらい従順でしたか。(8-11)

2:1 この出来事後、アハシュエロス王の憤りがおさまると、王は、ワシュティのこと、彼女のしたこと、また、彼女に対して決められたことを思い出した。2:2 そのとき、王に仕える若い者たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを捜しましょう。2:3 王は、王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、シュシヤンの城の婦人部屋に集めさせ、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧に必要な品々を彼女たちに与えるようにしてください。2:4 そして、王のお心にかなうおとめをワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心になつたので、彼はそのようにした。2:5 シュシヤンの城にひとりのユダヤ人がいた。その名をモルデカイといって、ベニヤミン人キシユの子シムイの子ヤイルの子であった。2:6 このキシユは、バビロンの王ネブカデネザルが捕え移したユダの王エコヌヤといっしょに捕え移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕え移された者であった。2:7 モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。このおとめは、姿も顔だちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。2:8 王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くのおとめたちがシュシヤンの城に集められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エステルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。2:9 このおとめは、ヘガイの心にかない、彼の好意を得た。そこで、彼は急いで化粧に必要な品々とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女にあてがった。そして、ヘガイは彼女とその侍女たちを、婦人部屋の最も良い所に移した。2:10 エステルは自分の民族をも、自分の生まれをも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはならないと彼女に命じておいたからである。2:11 モルデカイは毎日婦人部屋の庭の前を歩き回り、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。

4. エステルはどのようにして王妃になりましたか。(12-18) エステルの美しさは他のおとめたちとどのように違っていましたか。エステルとモルデカイはどのようにして王の命を助けることができましたか。(19-23)

2:12 おとめたちは、婦人の規則に従って、十二か月の期間が終わって後、ひとりずつ順番にアハシュエロス王のところに、はいつて行くことになっていた。これは、準備の期間が、六か月は没薬の油で、次の六か月は香料と婦人の化粧に必要な品々で化粧することで終わることになっていたからである。2:13 このようにして、おとめが王のところにはいつて行くとき、おとめの願うものはみな与えられ、それを持って婦人部屋から王宮に行くことができた。2:14 おとめは夕方はいつて行き、朝になると、ほかの婦人部屋に帰っていた。そこは、そばめたちの監督官である王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王の気に入る、指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかった。2:15 さて、モルデカイが引き取って、自分の娘とした彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところにはいつて行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。2:16 エステルがアハシュエロス王の王宮に召されたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。2:17 王はほかのどの女たちよりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と恵みを受けた。こうして、王はついに王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。2:18 それから、王はすべての首長と家臣たちの大宴会、すなわち、エステルの宴会を催し、諸州には休日を与えて、王の勢力にふさわしい贈り物を配った。2:19 娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門のところにもすわっていた。2:20 エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、まだ自分の生まれをも、自分の民族をも明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じように、彼の言いつけに従っていた。2:21 そのころ、モルデカイが王の門のところにもすわっていると、入口を守っていた王のふたりの宦官ビッグタンとテレシュが怒って、アハシュエロス王を殺そうとしていた。2:22 このことがモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。2:23 このことが追及されて、その事実が明らかになったので、彼らふたりは木にかけられた。このことは王の前で年代記の書に記録された。

II.神様の敵にひざをかがめてひれ伏さないモルデカイ (3章)

1. ハマンはどんな人でしたか(1)モルデカイはすべての首長たちの上というハマンの高い地位に屈しないで、ひざをかがめてひれ伏さなかった理由は何でしょうか。(2-4)ハマンはどのぐらいに憤りに満たされましたか。(5-6)

3:1 この出来事の後、アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。3:2 それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうとしなかった。3:3 王の門のところにいる王の家来たちはモルデカイに、「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか。」と言った。3:4 彼らは、毎日そう言ったが、モルデカイが耳を貸さなかったので、モルデカイのこの態度が続けられてよいものかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。モルデカイは自分がユダヤ人であることを彼らに打ち明けていたからである。3:5 ハマンはモルデカイが自分に対してひざもかがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされた。3:6 ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。

2. ハマンはなぜ、モルデカイの民族を根絶やしにしようとする計画を企てたでしょうか。(7-11)彼は自分の計画を実行するために、王の命令をどのように悪用しましたか。(12-15)。

3:7 アハシュエロス王の第十二年の第一の月、すなわちニサンの月に、日と月とを決めるためにハマンの前で、プル、すなわちくじが投げられ、くじは第十二の月、すなわちアダルの月に当たった。3:8 ハマンはアハシュエロス王に言った。「あなたの王国のすべての州にいる諸民族の間に、散らされて離れ離れになっている一つの民族がいます。彼らの法令は、どの民族のものとも違っていて、彼らは王の法令を守っていません。それで、彼らをそのままにさせておくことは、王のためになりません。3:9 もしも王さま、よろしければ、彼らを滅ぼすようにと書いてください。私はその仕事をする者たちに銀一万タラントを量って渡します。そうして、それを王の金庫に納めさせましょう。」3:10 そこで、王は自分の手から指輪をはずして、アガグ人ハメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンに、それを渡した。3:11 そして、王はハマンに言った。「その銀はあなたに授けよう。また、その民族もあなたの好きなようにしなさい。」3:12 そこで、第一の月の十三日に、王の書記官が召集され、ハマンが、王の太守や、各州を治めている総督や、各民族の首長たちに命じたことが全部、各州にはその文字で、各民族にはそのことばでしるされた。それは、アハシュエロスの名で書かれ、王の指輪で印が押された。3:13 書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。3:14 各州に法令として発布される文書の写しが、この日の準備のために、すべての民族に公示された。3:15 急使は王の命令によって急いで出て行った。この法令はシュシヤンの城でも発布された。このとき、王とハマンは酒をくみかわしていたが、シュシヤンの町は混乱に陥った。

III. 私は、死ななければならないのでしたら、死にます。(4章)

1. 王の命令とその法令が届いたとき、モルデカイとユダヤ人たちの心はどうでしたか。(1-3)モルデカイは王妃エステルに何を頼んだでしょうか。(4-8)ところが、その頼みとはエステルの立場からは非常に困る頼みでしたか。(9-11)

4:1 モルデカイは、なされたすべてのことを知った。すると、モルデカイは着物を引き裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、大声でひどくわめき叫びながら町の真中に出て行き、王の門の前まで来た。だれも荒布をまとったままでは、王の門にはいることができなかったからである。4:2 王の命令とその法令が届いたどの州においても、ユダヤ人のうちに大きな悲しみと、断食と、泣き声と、嘆きとが起こり、多くの者は荒布を着て灰の上ですわった。4:3 そのとき、エステルの侍女たちと、その宦官たちがはいて来て、彼女にこのことを告げたので、王妃はひどく悲しみ、モルデカイに着物を送って、それを着させ、荒布を脱がせようとしたが、彼はそれを受け取らなかった。4:4 そこでエステルは、王の宦官のひとりで、王が彼女に仕えさせるために任命していたハタクを呼び寄せ、モルデカイのところへ行って、これはどういうわけか、また何のためかと聞いて来るように命じた。4:5 それで、ハタクは王の門の前の町の広場にいるモルデカイのところに出て行った。4:6 モルデカイは自分の身に起こったことを全部、彼に告げ、ハマンがユダヤ人を滅ぼすために、王の金庫に納めると約束した正確な金額をも告げた。4:7 モルデカイはまた、ユダヤ人を滅ぼすためにシュシヤンで発布された法令の文書の写しをハタクに渡し、それをエステルに見せて、事情を知らせてくれと言い、また、彼女が王のところに行って、自分の民族のために王にあわれみを求めるように彼女に言いつけてくれと頼んだ。4:8 ハタクは帰って来て、モルデカイの伝言をエステルに伝えた。4:9 するとエステルはハタクに命じて、モルデカイにこう伝えさせた。4:10 「王の家臣も、王の諸州の民族もみな、男でも女でも、だれでも、召されないで内庭にはいり、王のところに行く者は死刑に処せられるという一つの法令があることを知っております。しかし、王がその者に金の笏を差し伸ばせば、その者は生きます。でも、私はこの三十日間、まだ、王のところへ行くようにと召されていません。」

2. モルデカイはエステルの中の地位について何を警告しましたか。また、何を悟らせてくれましたか。(12-14) モルデカイにはどんな信仰がありましたか。エステルは王妃の地位を用いて何をしようとしたのでしょうか。どんな覚悟を持つようになりましたか。(15-17)

※上の内容で、エステルの美しさとそのために手に入れられた王妃の地位が何のためであることかについて話し合ってみましょう。

4:12 彼がエステルのことばをモルデカイに伝えると、4:13 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。4:14 もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

“For if you remain silent at this time, relief and deliverance will arise for the Jews from another place and you and your father’s house will perish. And who knows whether you have not attained royalty for such a time as this?” 4:15 エステルはモルデカイに返事を送って言った。4:16 「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとえ法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」4:17 そこで、モルデカイは出て行って、エステルが彼に命じたとおりにした。